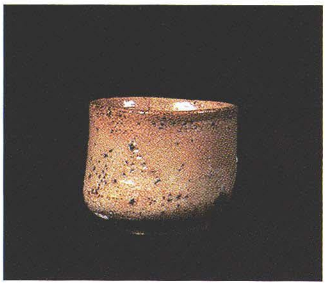
マイコーナー 241

唐津盃銘「むし歯」と粉引徳利　銘酔胡

左京区　田中　誠孝

　酒を嗜む御仁はお判りだと思うが桃山時代の唐津盃銘「むし歯」というのがある。その筋では結構有名で古唐津の愚意呑のことである。これを見出し銘々したのは青山二郎（古陶磁器研究家・装丁家・美術評論家）である。無地唐津で細かい貫入があり年月を感じさせる色合いがある。片方が歪んでいる、歪んでいるというより片方がいいように膨らんでいるのである。柳腰のようなすらっとした膨らみではないし、かといってぷくっとした膨らみでもない、「ほどよい膨らみ」なのである。人間の顔に例えればう歯で感染しあるいは歯周病で頬が膨らんだというような形である。口辺の造りは薄く、釉は黄味をおびた淡紅色で火間（釉薬がかからず土が見える部分で、特に褐色に発色しているもの）があり僅かに梅華皮（かいらぎ：鮫の皮を思わせる縮れた複雑な肌の調子）がある。このような自由奔放な銘々の仕方は青山二郎たる所以で小林秀雄ら文人や白洲正子らとの交流で大きな影響を及ぼしたと云われている。



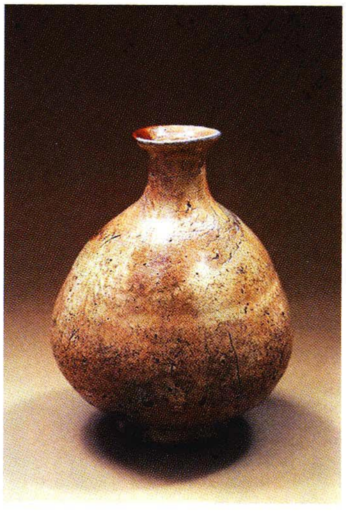
　我々の側からみると腫れているのに「むし歯」という銘はおかしな具合にうつる。う窩（むし歯）であれば穴であって膨らみではないからである。江戸時代であれば「はくさ、はくされ」というのであろうが。しかし、明治34年生まれの一般的な見方としてはむし歯からの腫れでそのような表現をしたであろうと想像がつく。

　とにもかくにも「むし歯」は蜂窩織炎をおこしたような膨らみが片方ににあり、古唐津の風格がにじみ出ており酒器盃が好きな方には垂涎のものらしい。骨董を確立した青山二郎の眼が選択し、「余之愛玩陶器中五指之中優物也」として愛玩し、小林秀雄らと酒席で用いたと云う。

　また、実物は見たことがないが粉引徳利銘酔胡というのがある。青山二郎が旧蔵していたと云われている。正確には朝鮮で小学校の教師をした浅川伯教→耳庵・松永安左エ門→青山二郎→小林秀雄と伝わり、銘酔胡は松永安左エ門がつけたらしい。

　酔胡とは伎楽に用いられる酔胡王（酔った胡人を引き連れて登場する酔胡の王様）からきていると推察される。

　美術館の写真で見ると下膨れのずんぐりした徳利である。私は酒はほとんど呑めないので実際の使用感はわかないがよく使い込んだとみえてしっとりと落着いた感じがする。



　松永耳庵が酔胡と銘をした李朝の粉引徳利を、骨董に優れた眼をもっていた青山二郎はこの徳利を「狸の金玉」と呼び仲間と酒を酌み交わしていたらしい。なるほどそう言われると普通の徳利よりも胴の下がなんともいいように膨れている。舟徳利も胴の下が安定するように膨れているがそれとは全くちがうもので妙に狸のそれと云われると納得するような形態である。「むし歯」と「狸の金玉」が差しつ差されつとは非常に面白い。もっともらしい銘など歯牙にもかけぬ感性でよくぞ名づけたものである。

　このように陶磁器を通してそれに隠されている歴史や慣習等を知ることとなりさらに趣味の茶陶は深まるばかりである。

伎楽　伎楽(ぎがく)とは、雅楽の唐楽や高麗楽と同じく、古代に日本に伝わった舞楽・芸能で、「呉楽(くれがく)」とも呼ばれる。楽器演奏を伴う無言の仮面劇。法会の供養楽として八世紀後半に最も栄えたが、雅楽等によって衰退した。